

## 大都市近郊に居住する高齢者が感じる生活圏

オオハタ マサユ カヤバ カズノリ  
大畑 政子\* 萱場 一則<sup>2\*</sup>  
マルヤマ ユウ オオツカ マリコ  
丸山 優<sup>2\*</sup> 大塚真理子<sup>2\*</sup>

**目的** 首都圏に隣接するA市在住高齢者を対象に、高齢者が生活圏と感じる地域の範囲について年齢、性別、家族構成、居住期間、手段的日常動作状況（IADL）、外出頻度を考慮しつつ明らかにする。

**方法** 調査対象者は、A市に在住している65歳以上の高齢者である。調査期間は、平成17年1月から2月であった。A市に在住する要介護認定をうけていない4,000人を無作為に抽出し、郵送式自記式質問紙調査を行い、3,070人（77.0%）から回答があり、有効回答数2,692（67.3%）を分析した。

**結果** A市在住の高齢者が生活圏と感じる地域範囲は、A市全域が最も多く、次いで、地区センターであった。これらが全体の半数以上を占めており、生活圏を広く感じていた。一方、最も回答が少なかったのは、中学校区、次いで小学校区で全体の3%弱であった。性別では、男性は地区センターの範囲、女性ではA市全域が最も多かったが、男女による生活圏の認識には統計的に差がなかった。年齢層別では、65～79歳までの各年齢層において最も多かったのが、A市全域、次いで地区センターの範囲であった。80歳以上になり自治会・町内会と最も狭い範囲に縮小した。家族構成別では、本人と親・子供の同居世帯を除くすべての世帯で、A市全域と感じているものが多く、本人と父母の同居世帯は、地区センターの範囲が多かった。居住期間では、10年未満のものは、地区センターが最も多く、10年以上のものはA市全域と広く感じているものが多い傾向にあった。手段的日常生活動作では、できると答えたものはA市全域、できないと答えたものは地区センターの範囲が多かった。週あたりの外出頻度別では、外出頻度が少なくなるにつれて生活圏の範囲が狭くなっていた。

**結論** 高齢者が感じる生活圏の範囲は一定ではなく、年齢、IADL、居住期間、外出頻度などにより異なることが明らかになった。高齢者が地域で自立して生活できるよう支援するには、それぞれの生活背景や、住民の思いを反映していく必要がある。今後は、地域の特性や環境も考慮し検討していきたい。

**Key words** : 生活圏, 介護保険, 高齢者, 都市部

\* 島根大学医学部看護学科

<sup>2\*</sup> 埼玉県立大学保健医療福祉学部

連絡先：〒693-8501 島根県出雲市塩冶町89-1  
島根大学医学部 大畑政子